【第３部】 分科会スピーカー プロフィール

○ヒトとテクノロジーがつくる災害に強いまち　　モデレーター：中澤　仁（なかざわ　じん）

酒井 太郎（さかい たろう）さかい内科・胃腸科クリニック 院長 ／ 鎌倉市防災・災害医療アドバイザー

獨協医科大学大学院卒業。2001 年からアメリカテキサス州のベイラー医科大学、MD アンダーソン癌センター勤務を経て 2007 年地元鎌倉でさかい内科・胃腸科クリニックを開院。鎌倉市出身。東日本大災害では宮城県南三陸町。熊本地震でも熊本県益城町で災害医療現場を経験。現在も年数回、東北訪問を継続。昨年の台風 19 号では鎌倉市内避難所での巡回を実施。

中村 彰二朗（なかむら しょうじろう）アクセンチュア株式会社福島イノベーションセンター（CIF）センター長

IT 業界、経営コンサル業界を経て、2011 年にアクセンチュア株式会社に入社。福島県及び東北復興を目的に設立した、アクセンチュア福島イノベーションセンターのセンター長に着任し、復興支援に従事する。

現在は、震災復興および地方創生を実現するため、首都圏一極集中から機能分散配置を提唱し、会津若松市をデジタルトランスフォーメーション実証の場と位置づけ先端企業集積を実現。そして会津で実証したモデルを地域主導型スマートシティプラットフォーム（都市 OS）として他地域へ展開、各地の地方創生プロジェクトに取り組んでいる。

○まちづくりとヒトの幸福度　　モデレーター：加治 慶光（かじ よしみつ）

安藤　健（あんどう たけし）パナソニック株式会社ロボティクス推進室　総括

早稲田大学理工学術院にて医療福祉ロボットの研究をした後、大阪大学医学系研究科保健学科にて看護分野への先端テクノロジー導入に取り組む。

その後、パナソニック株式会社へ入社し、一貫してロボットの研究開発・事業化に取り組んでいる。現在は、ロボット技術を活用したサービス領域の自動化による生産性の向上や、人の能力を拡張することで生活の質（QoL）の改善を目指した研究開発、事業化を推進している。

小林　正忠（こばやし せいちゅう）楽天株式会社 常務執行役員 Co-Founder and Chief Well-being Officer

1997 年 楽天の創業から参画。営業本部、マーケティング本部、国際事業等の立ち上げを行い、EC 事業責任者を長年務めた後、米州社長、アジア社長を歴任。

2017 年秋より楽天の企業文化強化および社内外のステイクホルダーを笑顔にすることをミッションとする Chief People Officer となり、さらに楽天のビジネスアセットを活用したサステナビリティ活動推進に加え、人々の働き方・生き方を模索するべく 2019 年夏から Chief Well-being Officer へ。慶應義塾大学 SFC 特別招聘教授。

村上 敬亮（むらかみ けいすけ）内閣府地方創生推進事務局　審議官

1990 年、通商産業省入省。湾岸危機対応、地球温暖化防止条約交渉、PL 法立法作業などに従事。その後、10 年にわたって、官の立場からインターネット普及期の IT 政策に携わり、著作権条約交渉、e-Japan 戦略の立案などに従事。

その後、クールジャパン戦略の立ち上げ、地球温暖化防止条約の国際交渉（COP15 と COP16）、再生可能エネルギーの固定価格買取制度の立ち上げなどを担当し、2014 年から地方創生業務に着任。2017 年から、国家戦略特区担当。

○ヒトにやさしい観光とまちの交通の未来　　モデレーター：押田 佳子（おしだ けいこ）

三好 孝弘（みよし たかひろ）MONET Technologies 株式会社事業推進部 担当部長

2019 年 2 月に始動したソフトバンク株式会社やトヨタ自動車株式会社などの共同出資会社で、次世代モビリティサービスの提供を目指す。鎌倉市、横浜市、千葉市、豊田市等全国 27 の自治体と連携し、オンデマンドモビリティサービスの展開を進めている。2020 年代には次世代車両による MaaS 事業も展開していく方針。

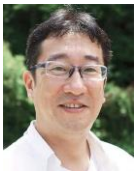
自身は、ソフトバンク株式会社から出向し、東日本エリアの責任者として活動中。

佐藤　彰洋（さとう あきひろ）横浜市立大学国際総合科学部　特任教授 科学技術振興機構　さきがけ研究員

東北大学大学院情報科学研究科修了。エージェントモデル、応用データ中心科学、メッシュ統計に関する研究に従事。2015 年から科学技術振興機構さきがけ研究員。

経済社会分野におけるシステム間相互作用とその共同現象に興味を持ち、集団行動に対するデータ駆動型マネジメントとそのデザインを主たる研究テーマとする。佐藤彰洋著、メッシュ統計（共立出版，2019）など著書複数。

榊原 正博（さかきばら まさひろ）ＮＰＯ法人湘南バリアフリーツアーセンター理事長 ／ 株式会社モノ・ウェルビーイング 代表



国立電気通信大学卒業後、総合医療機器メーカー技術開発部に所属し、CE マーキング取得プロジェクトに従事。画像診断用機器メーカーに転籍し、技術センターへ所属。

現在は、株式会社モノ・ウェルビーイングを立ち上げ、国内外の医療機器、福祉機器、健康機器の開発、許認可取得のコンサルティング業務を行う。

【第 3 部】　分科会

○ヒトとテクノロジーがつくる災害に強いまち

モデレーター：中澤　仁（なかざわ　じん）慶應義塾大学環境情報学部教授、同政策・メディア研究科委員
スピーカー　：酒井 太郎（さかい たろう）さかい内科・胃腸科クリニック 院長 ／ 鎌倉市防災・災害医療アドバイザー
中村 彰二朗（なかむら しょうじろう）アクセンチュア株式会社福島イノベーションセンター（CIF）センター長

中澤（モデレーター）
●市民による参加型センシングで道路の状況やまちの情報を集め把握する取組を行っている。
●防災は過去の予測により行われるが、想定外のことも起こり得る。そのため、「災害に強い」というのは、人自身の対応能力が求められる。
●市民が自ら問題を見つけて知らせることで、防災をジブンゴト化することができる。

酒井（スピーカー）
●東日本大震災、昨年の台風被害時など現場での医療活動を通じて、防災や”備え”について考えてきた。
●医療の現場からすると、緊急時に在宅で医療が必要な方の優先度がわかるような技術が欲しい。

中村（スピーカー）
●会津若松では、多様なデータを収集・管理・公開し、分野横断の分析、実験により都市インフラの最適化、産業高度化を進めている。
●日々の市民生活の向上を目指す「市民オリエンテッド」なスマートシティのためには、市民の個人データを市民自らが納得した上で提供してもらう必要がある。

会場の声
●減災のために、住民同士が地域で学びあう機会を作ることが大切だと思う。
●防災の最適化のために行政区に閉じず、広域で考える必要がある。枠組みに捉われず、個に必要なものが届く支援を俯瞰してみてほしい。
●リアルタイムで災害の状況や自らの危険について知りたい。

会場に「２つの問い」を投げかけ、参加者の皆さんには想いや考えをふせんに記入してもらい、会場全体で共有をしました。皆さんからよせられた内容は下記のとおりです。

【問い】

①防災についての皆さんの課題は？

②災害に強いまちという観点で公助に期待するものは何か？

参加者から(避難所)

●避難所が遠い。

●今後足腰が弱くなったら無事にたどり着けるか不安。

●初動対応が市民任せ。

●歩くの難しい。

●避難所行くの大変。

●テクノロジーの対応の前に避難場所がない。

参加者から(避難所)

●旧市内に高さ 15m制限があり、津波の逃げ場。

●観光客はどこへ避難させるのか。

●想定される災害がなにか。

●避難所どこ？

●家の中の安全を含んだ家から避難所までの安全なルート。

参加者から(情報発信)

●リアルタイムで災害の状況、自分の危険度が知りたい。

●防災情報はテレビ、ラジオが主導。

●停電時にどこが停電なのか町内でもわからない。

●鎌倉市は避難所運営に消極的、町内会連合会に丸投げ。

●被害の状況が 1 時間ごとにわかるようにしてほしい。

参加者から(情報発信)

●固定電話のみの方に詐欺防止機械の様に電話会社が無料で供給する。

●台風接近中に自宅周辺の危険度知りたい。

●自分の位置情報からスマホに適切な避難場所をリアルタイムで指示するような情報発信してほしい。

●情報が自治会通してしか送られてこない。→今後は入会しない世帯が増えるから個人に直接は送れないのか？

参加者から(情報発信)

●防災無線のみでは入りづらいから情報発信方法を柔軟に対応してほしい。

●詳細な情報が届かない、防災かまくらは聞き取れないこと多々あり。

●海の近くに住んでいるから早く津波情報を知りたい。

●ハザードマップが最新化されていない。

●津波は県の最新から 5 年間、洪水は 2 年間更新がない。

参加者から(情報発信)

●台風後の最寄り駅の運行、混雑状況をリアルタイムで知りたい。

●どこの災害情報を頼りにしていいかわからなかった。市役所の HP 見て一般的な台風の備えをした。隣のトタン屋根が散乱して怖かった。

参加者から(備え)

●防災訓練が少ない。

●準備する余裕がない。

●自分がどのコミュニティに入るのか、どんなコミュニティなのかわかるように。

●個に必要なものが届く支援を俯瞰して見てほしい。

●防災や有事の際で自宅にいられなかった場合、どうやって帰宅するのか。

●本来人が住むべきでない場所に家が建つ。

参加者から(備え)

●鎌倉という土地柄これまで多くの谷戸が崩れる・破壊されて、昨今の台風による風害がひどいから、崩れる前に山を崩さない手？を考えてほしい。

●地形などについて意識を高めるようなみんなで学ぶ機会を作ることが大切。

参加者から(家族への連絡)

●災害時に家族と一緒だとは限らないので、連絡手段が確保できるのか不安。

●家族がバラバラな場所にいる際の対応が難しい。

(津波)

●津波にどう備えたらよいかわからない。家も守りたい。

分科会②　まちづくりとヒトの幸福度

モデレーター：加治 慶光（かじ よしみつ）鎌倉市深沢地域整備事業推進参与
スピーカー　：安藤　　健（あんどう たけし）パナソニック株式会社ロボティクス推進室　総括
小林 正忠（こばやし せいちゅう）楽天株式会社 常務執行役員 Co-Founder and Chief Well-being Officer
村上 敬亮（むらかみ けいすけ）内閣府地方創生推進事務局　審議官

加治（モデレーター）

●人口減少社会に入り、20 世紀とは夢が異なる。
●一人ひとりが、自分の幸せの専門家であるべきである。
●市民は、行政や政治の難しさを理解し、共同で仕事をしていくことが成長の糧になる。

小林（スピーカー）

●他者と比較して優劣をつけることをやめれば、人は幸せになれる。鎌倉は他人との比較ではなく自分と向き合う人が多い印象。
●プラスな意識の人（1.1 の人）が掛け合わさると、1.21、さらに掛け合わさると数が大きくなっていく。1.1 の人が増えるように自分も行動していきたい。

安藤（スピーカー）

●何かアイディアがあれば、考えるだけで止めずに、少しでも行動してみることや、その仕組みが重要。
●幸福とは一人では完結することはなく、人との関わり合いの中で生まれる。そのちょっとしたサポートに、テクノロジーを活用できないかと考えている。

村上（スピーカー）

●地域の企業は、従業員の給料を上げること（成長戦略）を描くべき。
●成長を信じて、夢を語りあう人をつなげ直すファシリテータ役が重要で、つながればものすごいパワーになる。
●自分が、自信を持って人の役に立てると思うことができたら足も動く。

会場の声

●意識的に行動する人と、自然体でいたい人が共存できる土台として「まち」があるといいと思う。
●鎌倉はブランド力が高く、教養のある素敵な人が沢山集まっているので、議論ができる場があって良かった。引き続きこういう場を作って欲しい。

会場に「２つの問い」を投げかけ、参加者の皆さんには想いや考えをふせんに記入してもらい、会場全体で共有をしました。皆さんからよせられた内容は下記のとおりです。

【問い】

①2030 年における私の夢・幸せはどんなもの？

②それを実現するのにどのような問題（課題）がある？

参加者から(社会・世の中)

●暮らしの上で格差や差別のない社会であることが幸せと感じる。

●新しい日本のカタチ。

●東京一極（オリパラ後）崩壊

●地球の持続可能の実現できてない

●未来遺産を創造する

●老いない生活

参加者から(社会・世の中)

●Activity Village→Kamakura Town. City ではない。

●世界的に自然環境が守られ今以上に鉱業化しない社会で、身近な人親しい人と共に思いやり、愛し合える生活。

●Preserve　traditional architecture.

●overdevelopment.

●崩れ行く社会保障と多様な生活の実現。

参加者から(社会・世の中)

●意識的に行動する人と、自然体でいたい人が共存できる土台として「まち」があるといいと思う。

●鎌倉はブランド力が高く、教養のある素敵な人が沢山集まっているので、議論ができる場があって良かった。引き続きこういう場を作って欲しい。

参加者から(鎌倉)

●幸福を共有できる地域。そのために学びと啓発、あきらめず着実に。

●ロボットの馬に馬車を引かせてのんびりと鎌倉を観光。

●鎌倉が歴史や伝統だけでなく、新しいことにどんどん取り組んでいる街、そこで楽しみたい。

●多様な価値が認められる社会の雰囲気づくりに貢献。

参加者から(鎌倉)

●近隣者と外来者との触れ合いができる場を IT 実空間に作れること。

●鎌倉の魅力がいる人からも来る人からも共有することができるように。

●都市間・地域間で調和のとれたまちづくり。

●地域全体で支え助け合う育児環境。

●地域の発展と地域の一人一人とつながっていく。

参加者から(鎌倉)

●今経験していることを地元に広めて、そこから良い未来を生んでいくきっかけを作りたい。

●深沢のまちづくりが進み、孫と一緒に深沢のまちを散策している。

●家族が安心して住める街、特に医療・福祉の充実。

参加者から(趣味・夢)

●鎌倉の家庭料理を家でふるまう、ワインも（海外の方)。

●長年の自分の研究（趣味）をテーマに書いた本を通じて多くの人に豊かな時間を与えたい。

●充実したプライベートを持っている。

●趣味で社会とつながりたい。

●本を書き、内容を多くの人に説明したい。

参加者から(趣味・夢)

●自転車に乗って日本国中を旅している。

●健康維持。

●散歩しながら健康で他人を幸せにしている。

●健康で家族にも変わりなく友人とも語り合い、自然・芸術・おいしい酒と料理を楽しむ。

●家族みんなが笑顔でほっこりとした時間を過ごせていること。

参加者から(趣味・夢)

●宝くじ当選する方法の発明。

●自由な選択肢を持てていること（生活・仕事など)。

参加者から(仕事)

●楽しくやりがいをもって働いていること。

●地域の人たちとつながりがあること。

●泊まることで世界のためになる伝説のホテルを実現している。

●さらにグローバルに生きる。

●もっと家にいたい。

参加者から(仕事)

●鎌倉に住み、鎌倉で働く。

●自ら移住し、移住者プラットフォームを作る。

●三浦半島が女性がイキイキと地域活動や子育てをしながら仕事ができるエリアになってもらいたい。

●他社に役に立っていると実感する充実した仕事と生活。

●近隣で仕事をしながら家族仲良く暮らす幸せ。

参加者から(仕事)

●鎌倉で仕事している。

●自身の仕事を通して楽しい毎日を送っている人を増やす。

●家族が自立し、好きな仕事に打ち込める。

●人々の情報知識基盤である図書館が鎌倉市及び鎌倉を愛するコミュニティの中心として機能し、人々のウェルビーイングを担う場になる。

参加者から(健康・経済・仕事)

●自由であるためにどんなことが必要かまだわからない。

●何事も節度を持ち、労りの心を大切にして、感動と感謝を忘れないようにする。

参加者から(健康・経済・仕事)

●健康に不安があり自信がない。

●職住近接が家族の問題で難しい。テクノロジーで解決できないか・・・？

●地場の魚屋さんがない（野菜はある)。

●毎日 1 万歩欠かさず歩いて足腰鍛える。

●現在 67 歳、理想の夢を実現させるには健康でいること。

参加者から(健康・経済・仕事)

●地元の環境をどう把握するか。

●自分の資金確保。

●健康な体を維持する。

●経済的な縛り。

●自分の迷い。

●試してみる時間。

●相談する人のつながり。

参加者から(健康・経済・仕事)

●良いホームドクター。

●良い訪問看護。

●同居義父母の健康

●子どもたちのケア

●人と人とがつながれる場を増やすこと

●仕事内容

●仕事半分、自由半分の時間。

参加者から(行政・政治)

●”こと”を”もの”にすること。

●医療従事者の確保。

●施設の充実。

●コスト。

●まともな行政と政治が行われること。そんな政治家を選ぶ。

参加者から(行政・政治)

●より良い都市（地域）間競争のルール作り。

●予防医学の普及、それを支えるテクノロジーの実現。

●過去のやり方にこだわらない。時代を超えて共有できるものをどのように見つけるか？

●世界的に経済格差を減らし、貧困社会をなくし良い思想、哲学、宗教教育をしていくこと。

参加者から(行政・政治)

●私たち人類の意識の目覚め。

●人口減少 60%、40%の空き家の活性化。

●Creative solution to 空き家 problem.

●寛容な心、人間性について深く理解するための機会提供。

●歩き周れる街づくりが後押ししてくれる？

●定年後に就労するための準備及び社会的状況。

参加者から(行政・政治)

●女性の起業家を増やし、お互いがいい刺激を与え合い、時にサポートし合うことで共に成長し、他のエリアの人たちに興味を持ってもらう。

●自分を常にアップデートし続ける。

●自身の仕事をいかに多くの人に知ってもらえるかが課題。

●資金提供者。

参加者から(行政・政治)

●図書館は現在、図書施設と認識されているが、スマート図書館を構想して安藤先生や小林先生にお願いしてコミュニティの中心となり変革していく。

●年々少しづつ変化する家族との過ごし方、かかわり方。

●テクノロジーの発達、IOT、AI、通信インフラ？

●地域を巻き込む協力者。

参加者から(行政・政治)

●深沢のまちづくりのスピードが課題

●市民の声を取り上げて、チャレンジがしやすい場をつくっていく。

●仕事のことで頭がいっぱいになるので働き方改革を進めたい。

●今の市民生活・環境をお金の心配なく継続していること。

分科会③　ヒトにやさしい観光とまちの交通の未来

モデレーター：押田 佳子（おしだ けいこ）日本大学理工学部准教授/ 博士（農学・工学）
スピーカー　：三好 孝弘（みよし たかひろ）MONET Technologies 株式会社事業推進部 担当部長
佐藤　彰洋（さとう あきひろ）横浜市立大学国際総合科学部　特任教授 科学技術振興機構　さきがけ研究員
榊原 正博（さかきばら まさひろ）NPO法人湘南バリアフリーツアーセンター理事長 / 株式会社モノ・ウェルビーイング　代表

押田（モデレーター）

●「観光」に大事なことは「顎、足、枕」、顎は「食事」、足は「交通」、枕は「就眠場所」。
●「顎」と「枕」は、自分自身で何とかできるが、「足」はそうはできないことが多い。
●「観光」とは「日常から非日常への移動」が主のため、「交通」なしには成立しない。

三好（スピーカー）

●街中の交通標識、案内板、時刻表は分かりにくく、特に鎌倉市は土地的、法規制的な理由から、標識や案内版が複雑になりやすい。
●最近は、スマートフォンでこれらの課題解決を図っており、例えば「時刻検索、ルート検索、移動手段の手配、各種翻訳」が一気通貫で行えるようなサービスも登場している。

榊原（スピーカー）

●インバウンドや障害者への配慮について、日本では障害者を身体的な特徴でくくりがちだが、外国人も障害者も「案内板が読めない」など、抱えている問題は同じ。
●インバウンドと障害者への配慮を別々に捉えるのではなく、社会的な制約を受けていないか考えることが重要。

佐藤（スピーカー）

●観光客と住民生活の両立のためには、公共交通をもう一回見直す時期に来ている。
●単純に公共交通のルートや量を見直すという方法の他、自分たちから少し離れた資源（移動手段）を見つめ直す必要もある。
●移動に関して、観光客と地域住民で資源の融通を考える必要も出てくるだろう。

会場の声

●相変わらず道が混雑しているが、信号の動的制御等はやらないのか。
●人口の行動データ（ビッグデータ・AI 関連）の調査等が進んでいないのでは。
●公衆電話が少なくなってしまったが、高齢でスマホといったものに縁がないので、そういった人間を考慮したまちにして欲しい。

会場に「２つの問い」を投げかけ、参加者の皆さんには想いや考えをふせんに記入してもらい、会場全体で共有をしました。皆さんからよせられた内容は下記のとおりです。

【問い】

①皆さんにとってやさしい観光、やさしいまちの交通とは何でしょうか？

②わたしは今、どのような状態でしょうか？

参加者から(人と交通)

●鉄道と歩き。

●地域の人と触れ合うことができる。

●車がいない。

●人と車の導線が重ならない交通が観光地では理想の交通。

●人と車の密度解消

●渋滞の少ない道路整備。

参加者から(人と交通)

●歩道が広くてストレスなく歩ける道路。

●都市間の交通手段の問題より、小都市内の交通が重要。

●歩道のない自転車道のない交通がほとんど。

●安全な道路整備。

●優しい観光→便利な移動。

●優しい交通→便利で快適な交通。

参加者から(人と交通)

●優しい観光→同行者（地元の人、他の観光者）とよいコミュニケーションがとれる→行ってよかったと感じる。

●混雑していない、ゆとり、隙間がある状態の交通や観光。

●まず空間として込み合っていない

●昼と夜で混雑のバランスが取れている。

参加者から(人と交通)

●空いていて安心して歩けるようにする必要がある。

●車の数を減らすためのロードプライシングの実施。

●案内地へ運ぶための専用バス、自転車など。

●小道でもスムーズに歩けるようになればよいかな。

●歩行者ファーストの道路。

●高齢者のための移動の手段を、低料金化または無料にして閉じこもりを防ぐ。

参加者から(人と交通)

●歩行者、自転車のための、道路整備が重要。

●楽に歩けて、安全な歩道の整備。

●笑顔でまちのことが話せること

参加者から(人と人とのつながり)

●スマホのアプリ（トイレの場所が分かる、駐車場の状況が分かる、自転車をもっと活用する、高齢者、あかちゃん、体に不自由がある人にやさしい)。

●弱者が最低限観光を楽しめること

●必要以上な規制なく楽しめること。

●交通弱者に目を向けた、交通政策がすすめられること。

参加者から(人と人とのつながり)

●外国人（JICA,AOTS CIEE 等多数）を案内するとき、道の狭さ、車と同じ場所を歩く必要が多く、非常に危険を感じさせている（今小路の電柱等も)。

●高齢者、障害者、外国からの方、様々な立場の人がスムーズに移動し、楽しく観光ができること。

●多言語の分かりやすい標識。

●みんながゆずりあい、助け合える。

参加者から(人と人とのつながり)

●歩いて楽しめること、水辺（海や川）が身近なまちが好きです（金沢や京都)。

●公共の休憩場所が少ない。

●気遣いと気づかれない気遣い。

●その土地の歴史が分かる。

●その土地の人と接点が持てる。

●住民にとって優しい交通。

参加者から(人と人とのつながり)

●里山の上の住民のため、町内まで運んでくれるミニバスの運行が欲しい。

●声を書けられる環境があること。

●駅頭にボランティアがたくさんいて、困っているときなど、気軽に聞けて助けてくれる。

参加者から(情報)

●道路標識が多すぎて、統一されておらず分かりにくい。

●分かりやすいこと（情報があること)、どのような状態、歩きやすいまち、手荷物が移動先で受け取れたり、マイカーを置いて移動しやすい。

●案内施設がしっかりしていること（案内人、相手を考えた案内、交通体制等)。

参加者から(情報)

●利用方法を明確、仕組み統一。

●身軽に動ける。

●トイレ、水分補給ができる。

●休む場所がある。

●座って移動できる。

●乗りたいときに乗れる。

●値段が安い。

参加者から(情報)

●行きたいところへの表示がはっきり分かり、乗り降りしやすい。

●バスでの移動がしやすい